

# R子さん 自分を語らなかつた



志茂田景樹  
(作家・タレント)

1940年、静岡県生まれ。日本文芸家クラブ会長。大学卒業後、探偵や保険調査員など20種類以上の職業を経験するうちに、小説家を志す。'80年に『黄色い牙』で直木賞を受賞。現在、執筆、タレント活動の他、ツイッターでの人生相談が好評で、フォロワーは40万人を超える。

## R子さんの笑顔で不安が消える

もう半世紀も経つのに、心に濁りのような届託を感じたときに、R子さんの短い言葉と笑顔を思いだすことがある。いや、よく思い浮かべている。

いくつかの職を経て保険関係の調査会社に調査員として勤めた。R子さんは調査員の業務を事務処理の面でサポートする仕事をして、三十代半ばだった。仕事ぶりがテキパキしていた。小柄でボーグルシユな服装が似合う人で、R子さんには、心に濁りのような届託を感じたときに、R子さんの短い言葉と笑顔を思いだすことがある。いや、よく思い浮かべている。

面接で採用されて初出勤の日、いきなり北陸一週間の出張を命じられて面食らうと共に不安になつた。二年足らずの探偵社勤務の経歴が買われて採用されたのは確かだが、この会社は保険会社の委託を受けて被保険者の病歴などを調査するところで、探偵社とはだいぶ趣が違う。

いきなり、右の二の腕あたりを軽く叩かれ  
た。R子さんが横にいた。僕と目が遇うと、

「大丈夫よ」

と、言つてかすかに首を傾けて笑顔になつた。

R子さんはすぐに離れていつたが、僕の不  
安は泡沫のように消えていた。

翌朝早く二件の調査案件をもつて北陸へ旅  
立つた。生命保険加入時の審査は異状なしだ  
ったのに、契約後二週間でがん死した被保険  
者の病歴調査には苦労した。近隣の医院、病  
院に当たつて治療中だつたことが判明すれば  
病中契約で、明らかに不正契約になる。

会社に電話を入れた。R子さんが出た。

「被保険者宅の近隣の医院や、病院に当たつ  
たんですが、空振りばかりで……」

僕が弱音を吐くと、R子さんはすぐに、

「そこは各駅停車駅の地よね。二駅上りの  
急行停車駅近くの病院や、消化器専門クリニック  
を当たつてみて」

と、アドバイスをしてくれた。礼を言つて  
電話を切ろうとすると、R子さんは、

「いいセンいってるよ」

と、言葉少なに言つて電話を切つた。

あの笑顔が浮かんだ。

僕はゆつくりと公衆電話の受話器を戻した。

急行停車駅近くに消化器専門の小病院があ  
つて、一番にそこに当たると被保険者は保険  
加入時、直腸がんに転移性の肺がん、肝臓が  
んを併発していた。保険外交員、審査医も結  
託しての不正契約だつた。

R子さんのお陰で、僕は入社早々お手柄を  
立てることができた。

## 自慢をしない人

R子さんは調査員のアイドル的存在だつた。  
とにかく好かれる。表情を見て何を考えて  
いるかをとつさに悟れるほど繊細な人なのだ、  
と常にかく好かれる。表情を見て何を考えて

と私はリスクペクトする心地で舌を巻いた。

当然、優しい。言い過ぎがなく、発言の余韻のような笑顔がこつちの曇つた心を晴らしてくれた。

そう、自分の自慢をしない人なのだ。R子さんは二、三度飲んだ。

「出張の帰りはたとえ百円二百円のものでも奥さんにお土産を買つていくといいよ」

僕は二年余りの同棲を経て正式に結婚してまだ半年足らずだった。その通りに土産を買って渡したら、妻はまるでダイヤの指輪でも貰つたように喜んだ。

そのときにハッと気づいたことがあった。

R子さんのプライベートなことについては何一つ知らないという事実だった。結婚しているかどうかさえ知らなかつた。

R子さんは自己を殆ど語らない人だつたのである。

R子さんは相変わらずアイドルだった。あ

の笑顔には一点の曇りもなかつた。ときどき、優しい心から溢れこぼれたような笑い声を立てることがあつた。

やがて、僕は保険の調査員の仕事に飽きて転職を考えだした。それを悟つたように、R子さんは僕を飲みに誘つた。

僕たちは楽しく飲んだ。

「私も辞めるのよ」

不意にR子さんは寂しい表情を見せた。

「田舎の母が具合悪いの……」

R子さんは初めて自分を語った。父と弟を車の事故で失い、肉親は老いたお母さんだけだという。

R子さんは寂しさを内に秘めた健気で気遣いの人だつた。人に優しくして人を元気にさせる言葉と笑顔をふりまくことで、自分の寂しさを紛らせていてるのである。

あの気遣いに、僕は今でもしびれることができた。